

国際交流事後活動ニュース

MACROCOSM



Contents

第17回「世界青年の船」事業	2
青年社会活動コアリーダー招へい事業	6
ターニングポイント	9
全国推進会議より	17
全国大会	19
「世界青年の船」事業報告会	20
討議セッション	21

マクロコズム
2005.5 vol.64

(財)青少年国際交流推進センター

第17回「世界青年の船」事業(SWY17)

3月2日に第17回「世界青年の船」事業が終了しました。今年度から「世界青年の船」事業には、船内活動の中心的なプログラムとして「コース・ディスカッション」を取り入れました。「異文化理解」、「経済」、「教育」、「環境」、「情報／メディア」、「国連」の6つのコースにおいて、「青年の社会参加」を共通テーマにディスカッションを行い、参加青年の各分野についての知識及びそれらの分野において、青年が果たすべき社会的役割についての認識を深めるとともに、実践力の向上を図りました。寄港地であるオーストラリア、ニュージーランド、フィジーにおいても、それぞれ特色を活かしたプログラムが組まれました。オーストラリア（シドニー）では、コース・ディスカッションのグループ毎にコース内容に添った訪問先が選定されました。

オーストラリア(シドニー)
寄港地活動

異文化理解コース／先住民(アボリジニ)が初めてヨーロッパ人に会ったとされる土地、ラ・ベルースで長老の女性二人から話を聞く



環境コース／レンコープ国立公園にてレンジャーから保護された野生動物を使った環境教育について説明を受ける

経済コース／オーストラリアの貿易政策をグローバルセッションについての講義を受ける



第17回「世界青年の船」事業スケジュール

参加青年来日・国内活動 (外国青年のみ)	2005年 1月11日～1月16日
出航前研修	1月16日～1月18日
横浜(日本)	出航 1月19日
サイパン(アメリカ合衆国)	1月23日(給油・給水)
シドニー(オーストラリア)	2月1日～2月4日
ウェリントン(ニュージーランド)	2月10日～2月13日
スバ(フィジー諸島共和国)	2月17日～2月19日
サイパン(アメリカ合衆国)	2月26日(給油・給水)
横浜(日本)	帰港 3月2日



教育コース／各国の「健康」の分野における問題を比較し討議した

サマリーフォーラム／コース・ディスカッションを通じて学んだことをコース毎に発表し、共有した（国連コースの発表）



船内活動



国連コース／参加青年を主体とした模擬国連を行い、活発な意見交換がされた



情報コース／乗船前に各国で同日・同時間に収録したニュースを紹介しあい、グローバルメディアとローカルテレビの比較などの討議を展開させた

コラム

～SWY17 Tsunami Relief Fund～

昨年の12月末に起きたスマトラ島沖大地震とその津波の被害のニュースは、SWY17の出航を目前に控えた時期に流れてきました。そのニュースを聞いたSWY17の参加青年の中から自主的に、募金活動をしよう、という動きがでてきました。3,000米ドルを集めることを目標に、チャリティー・バザーやオークション、チャリティー・コンサート、バレンタインカードとチョコレートの販売など、たくさんの催し物が開催されました。それらの中には、マッサージやネイルアートをしてもらい、その対価を募金するという企画や、食事の時間にダイニングの中央で得意な音楽を披露した人に対してお金を出す、というような楽しい企画もありました。結果として、SWY17の船上で約58万円の募金を集めることができました。参加青年は無理をして募金をするのではなく、催し物を企画する側も参加する側も自主的な活動に取り組み、その結果として大きな成果を残すことができたのです。船の共通テーマとして「青年の社会参加」を掲げたSWY17ですが、その第一歩を船上の活動で踏むことができたのではないのでしょうか。



世界青年の船に参加して 加藤由美子



南太平洋のゆったりとした時間、ラテンアメリカの溢れる情熱、北米のブラックユーモア、ヨーロッパのおとぎ話のような舞踏、アフリカ大陸の躍動感溢れるダンス、そして日本の穏やかな熱さ。生きた「人」を通してある国の存在を感じることにこのことがもたらす素晴らしさを感じた43日間でした。

私たちは、「青年の社会参加」を共通テーマとして、異文化理解、経済、教育、環境、情報・メディア、国連の6分野に分かれたコース・ディスカッションをメインプログラムとし、その他様々な交流活動に取り組むとともに、オーストラリア、ニュージーランド、フィジーで寄港地活動を行いました。世界の国の文化、習慣、政治、経済、歴史、そして世界中で起こっている様々な問題について、各種の情報媒体からインプットすることは可能です。しかし、いくらその国の情報を活字や映像で知っていたとしても、生活者の目を持たない者には見えないものがあります。一つの地球規模問題を取り上げるにしても、各国によって捉え方、問題の認識度が異なります。このプログラムは、それらの情報を大切な友人からの生きた言葉として感じられる貴重な機会でした。

ある日の夜、何人かの参加者が集まって、1枚の写真（ハゲタカが瀕死の子どもを狙っている写真）をもとに、援助のあり方について語り合いました。そしてそこでの「何かしたいと願う一方、今の自分の生活レベルを極端に落とすことに対する抵抗を否定できない」「それでもいい。大切なのは、自分にできるレベルで継続して援助をすること。無責任に途中で投げ出すことが一番相手を傷つける」というやりとりが印象的でした。肩の力を抜いて、自分の素直な気持ちを肯定しながら、自分の持っている力の1



フィジーの村訪問にて

割でも、周りの人の幸せに貢献すること
にえば少しずつ世界はよくなっていく
のかもしれない。

普段の生活の中で、自分の視野を日々
の生活の関心事から社会の出来事へ拡張
することは難しいかもしれません。国名
や国旗の背後に友だちの顔を思い浮かべ、
その仲間の変わらぬ笑顔との再会を願う
とき、彼らが大切にする国全体の幸せも
願う、そんな気持ちが地球規模問題を解
決する原動力につながると信じています。

青年国際交流事業は、プログラム終了
後すぐに目に見える結果が出る性質の
ものではないため、イベント的要素しか持
たないと批判されることもあります。し
かし、地位、立場を意識しない場で芽生
えた友情が持つパワーは必ず将来につな
がると確信しています。文化の違いが衝
突を招く悲しい現実があります。しかし、
私たちは文化の違いが人々にもたらす感
動を心の底から感じました。これは、確
実に心に影響を与えて、それは永遠に生
きていくものです。教育、経済、法律、
芸術、科学技術、医療、各自が地に足を
つけてその専門を深めていく一方で、常
に煌く思い出とともに世界との繋がりを
感じていれば、いつか大きな変化がもた
らされるのではないのでしょうか。

この世の中で、出会うべき人には必ず
出会う。一瞬遅くもなく、一瞬早くもなく。
素晴らしい人たちとの出会いに感謝しま
す。

津波募金活動の準備を
している様子



SWY17参加青年仲間
と共に



平成16年度 青年社会活動コアリーダー育成プログラム

平成17年1月26日～2月8日

平成16年度「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」は、オーストラリア（青少年分野）、スウェーデン王国（高齢者分野）、アメリカ合衆国（障害者分野）への派遣と、これら3か国から3分野の活動家の日本への招へいが行われました。日本での招へいプログラムでは、東京でNPOフォーラムが実施され、地方プログラムでは分野毎に大阪府、和歌山県、長崎県を訪問しました。受入県では、各分野の専門に対応した訪問先が設定されるとともに、地方セミナーが開催され、意見交換や懇談の場が数多く設けられました。

月 日	日 程
1月26日(水)	外国参加青年来日
1月27日(木)	全体オリエンテーション／分野別オリエンテーション／行政官による講義／歓迎レセプション
1月28日(金)	NPOフォーラム
1月30日(日)	
1月31日(月)	課題別視察
2月1日(火)	地方プログラム
2月6日(日)	【高齢者関連分野(大阪府)】 廣岡光博大阪市市民局市民生活振興部長表敬訪問／大阪YMCA「サンホーム」／大阪市立淀商業高等学校福祉ボランティア科／多福院／積水ハウス納得工房 【障害者関連分野(和歌山県)】 小佐田昌計和歌山県副知事表敬訪問／社会福祉法人一麦会 麦の郷／社会福祉法人桃の木会／きのかわ養護学校／身体障害者療護施設リハビリ橋本 【青少年関連分野(長崎県)】 金子原二郎長崎県知事表敬訪問／日吉青年の家／大野木場小学校・垂木大地／災害復興記念館／原爆資料館・平和公園
2月7日(月)	コースミーティング／コース別発表会／成果評価会／修了式／歓送夕食会
2月8日(火)	外国参加青年帰国

青少年分野地方プログラム

長崎県青年国際交流機構

山田 公美

1) 受け入れ準備について

今回の実行委員会では、「外国の青年社会活動のリーダーから、ひとつでも多くのことを学びとろう、そして私たちの実践活動にいかしていこう」という気持ちで準備が始まった。実行委員も、青年団、大学生のボランティアリーダーを中心に若手メンバーで構成され、長

崎 IYEOはこれまで受け入れてきた経験はあったが、新メンバーとともに手探りの状態で実行委員会が立ち上げられた。また、テーマ決定に関しても、一時は暗礁に乗り上げた時もあったが、回を重ねることで、お互いの考えや今回のプログラムの方向性も見えてくるなど、学びたいことが絞られていった。

2) テーマとその達成について

今回のテーマは、青年ボランティアリーダーの育成に向け、「今、社会が望んでいるリーダー像」を各国の活動について意見交換を行うことで具体化していくことだ(〆)

目的

活力ある「共助」の社会を築いていくためには、地域住民やNPO等のボランティアの社会活動の充実が必要であり、今後、活動に参加する人々の裾野を広げ、ボランティア同士の連携を図ることにより、様々な分野で社会活動を拡大しつつ分野をまたがる総合的な取組を進めていくことが重要である。そのためには、活動の中心的担い手となるリーダーの養成が急務であるが、我が国においては、まだその体制が整っていない状況にある。本プログラムは、このような観点から、社会活動の青年コアリーダーの能力の向上とネットワークの形成を図るものである。



歓迎レセプション



行政官による講義
 高齢者分野／成田 聡 少子・高齢化企画第2担当参事官補佐(写真)
 障害者分野／高井 修 障害者企画第2担当主査
 青少年分野／坂本眞一 青少年企画・調査担当参事官補佐

(ㄨ) った。しかし、日本語と英語の言葉の微妙な違いもあり、外国青年に「ボランティアリーダー」の意味が十分理解されなかったようである。そのために、外国側からは「必要なリーダーの資質」や「リーダー育成」について納得のいく回答が得られなかったような気もする。求められるボランティアについて、日本側からは「即戦力になること」や「継続して活動をすること」といった意見があったが、外国ではそのことはあまり重視されていないようだった。むしろ、団体の利益よりも、まずはボランティアをする個人のことをより大切にしようとする思いが感じられた。希望者には技術を習得できる機会を与えたり、

その専門的な知識や技術を別のところでいかしたりするなど、ボランティア活動の充実のためには常にステップアップすべきだと考えているようだった。そのために、スウェーデンのリーダーからは「なぜボランティアのリーダーを育成する必要があるのか?」「ボランティアリーダーに求められる資質などをここで論議する必要はないのではないか?」というきびしい声が出てきた。さらには、ボランティアをしたいという気持ちこそが、一番に求められる資質であるという意見も出た。本当にボランティアの裾野を広げていくためには、日本も、もう少し柔軟な考えを持つべき時期に来ているのかもしれない。(メ)

次ページへ続く



高齢者分野（大阪府）大阪YMCA高齢者支援施設「サンホーム」の入居者と面会



障害者分野（和歌山県）和歌山県庁表敬訪問



青少年分野（長崎県）垂木大地植林体験



評価会で意見を述べる外国参加青年

- (4) 各国の活動・ボランティアの意識・ボランティアスタッフへの期待など、各国の事情を知る良い機会となり、また、ボランティアという意味を改めて考える絶好の機会となったと感じる。

3) 事後活動に向けて

今後は、地域で活動する団体とのネットワークの形成を図るとともに、各国のリーダーと交流を継続することで、今回のテーマをさらに深めていきたいと考えている。意見がまとまらなかったこともあったが、それは今後のテーマ選択において参考になったといえる。

4) 来年度に向けて

時間を有効に活用し、有意義な意見交換をするためにも、実行委員会・交流団体は、各国の活動団体の事情について、事前に勉強会を持つことが必要であると思う。事前学習をすることで、さらに詳しく知りたいことや質問したいことなどが明確になり、また、より多くのことを各国のリーダーから引き出すことができると考える。



谷口智子さん 第6回「世界青年の船」参加青年

谷口さんは、1994年第6回「世界青年の船」に参加、2001年には「国際青年育成交流事業」の副団長としてオーストリアに派遣されています。「世界青年の船」（以後、世界船）での体験は高校の英語の教科書にも掲載されました。1994年にJPモルガンに入社、現在はトレーディングデスクの損益・リスク管理をするミドル・オフィスに所属し、日々刻々と変化するグローバル・マーケットの中で活躍中です。

◀ 第6回「世界青年の船」参加当時の谷口さん。教科書にも同じ衣装姿の谷口さんの写真が掲載されている。

「世界青年の船」での経験が高校の教科書に掲載

—高校の教科書に「世界船」のことを書くきっかけは何でしたか。

事業に参加した後、感想文を書くように頼まれました。それがたまたま教科書会社の人の目に留まったようです。教科書では单元ごとに生徒に伝えたいコンセプトがありますが、国際交流がその時のテーマの1つだったのでしょね。私が書いた日本語の感想文を英訳してお渡ししました。実際には私が書いた英文そのものではなく、その单元で学ばせたい熟語などを入れたりして、教科書会社の人が加筆・修正し、立派な英語に生まれ変わって平成11年発行の教科書に載りました。でも、もうこの教科書は使われていないと思います。

無意識に活かされる経験

—世界船での経験が今のお仕事に役立っていると思うことがありますか。

実は、最初にこのインタビューのお話をいただいたときに、そういう部分が私にあったのかしらと考えました。でも、無意識のうちにその経験が活かされてきたと思います。特に、私はグローバルな会社で働いているということもあって、バックグラウンドも考え方も違う人々の間にいつもいるわけで、「世界船」の状況と同じですね。教科書にも書いたのですが、最初は、自分

が理解できない状況があっても、じっくり話をすると、相手のバックグラウンドや考え方が分かり、どうしてそういうことを言うのかが分かることがあります。相手を理解していく一歩になる。だから、相手の話を聞こうとか、相手も自分とは違う価値観で考えるから、こう思うのだろうとか、相手の立場に立とうとする姿勢であるとか…こういったことは今の仕事でも活かしているように思います。

—船内で印象的だった出来事がありますか。

ある国の参加者が、ビュッフェの時に、自分の国ではこんなに豊かに食事ができるところはないから、こんなにあふれんばかりの食事を見るとかえって食欲がなくなると言っていました。これを聞いて、自分の常識は世界の常識ではないこと、自分がいかに恵まれた環境にいるのかということに改めて感じました。「社会貢献」という言葉が大仰で恥ずかしいのですが、自分が持っている時間や力の中で、できることをしていくことが大切だと強く思いました。

国際青年育成交流事業の副団長

下船後ずっと、事業に参加したこと

で気づかされたり、感じさせられたりして、豊かな経験をさせていただいたという気持ちがありました。あのような形で違う国の人と知り合うと、その国で何か事件があるととても気になります。ちょっと規模が大きいですけど、世界平和や国際協力なども、あのような人と人との交流から、その国に自分が顔を認識できる人、名前でも認識できる人がいてその国全体に関心をもつところから始まると思います。船でそのことを強く感じたので、航空機派遣（国



交流する参加青年たち

際青年育成交流事業)でも同じことではないかと。そういうことでお手伝いができるのならば、ぜひさせていただきたいなと思って、航空機による青年海外派遣の副団長のお話もお受けしました。

仕事も同じですね。出張で実際に出かけて行って相手の顔を見ると、とてもスムーズに話もできる。まだ若い多感な時期にこれから社会で中心となっていく人たちが、事業を通じて他の国の人たちと交流をして、いろいろな価値観を知り、また歩み寄らないと何事も進まないということを肌で体験できる機会は非常に貴重です。だから、国際交流事業はずっと継続してほしいと思います。

世界船に参加するきっかけ

—世界船に参加するきっかけは何でしたか。

今は「高円宮杯」と名前が変わりましたが、昔は「高松宮杯英語弁論大会」という読売新聞社が主催する全国英語弁論大会がありまして、この企画運営をしている「日本学生協会基金」に学生のころ所属していました。ここでは、メンバーが中学校に出かけて行って、劇やゲームをしながら生の英語に親んでもらったり、留学生と交流したりしていました。ここの先輩が世界船に参加したということを知って、私も申し込みました。

思い出深いこととしては、英語教育への造詣が深く、国際交流の大切さを説いていらした高円宮様が名誉総裁として弁論大会に出席されたある時、「あなたは髪を切ったのですか」とお言葉をかけていただいたことがありました。こんな一介の学生のことも覚えていら

っしゃるのだと、とても感激したことがありました。

教科書に掲載されてよかった

この教科書を通じて学生さんにもこんな国際交流事業があることを知ってもらえますし、国際交流そのものに興味を持つきっかけにもなったという点でしょうか。せっかく、国が税金を使って実施しているわけですから、よりよい事業にしていかななくてはならないし、機会は皆に均等に開かれているわけですから、我々参加者もたくさんの人に知ってもらえるようないろいろな形で協力できたらいいですね。

大切にしていること

—生きていく上で何か大切にしていることはありますか。

バランス感覚のある人になりたいと思っています。そして、自分のしていることが自分にとって恥ずかしくないこと。私は社会人になって初めて、自分がこれまで社会の中でいかに「お客さん」だったか、ということを知ったのです。学生なら、授業料を払って学校に行くわけだから、ある意味「お客さん」ですよね。どこかに遊びに行くとしてもお金を払ってサービスを受けるから「お客さん」。自分が仕事をできるようになって初めて、いろいろな人が働いていて社会が成り立っていることを痛感しました。家族や友人、いろいろな人に支えられて生きています。ありがたいですね。

谷口さんが書かれた教科書本文の抜粋(和訳)

真っ青な空の下、「にっぽん丸」が出港しました。私たちはデッキの上で第6回「世界青年の船」の出航を祝っていました。13か国総勢275名の青年たち。私たちの前には様々な料理がのった長いテーブルがありました。どの料理もとてもおいしそうです。

私はどの料理から食べ始めようかと友人と楽しく話していました。その時、だれかがぶつぶつ言っているのが聞こえました。私とその男性のほうを向くと、彼は何も食べる気がしないと断言していました。その人は食べ物が十分でないアフリカの出身でした。こんなすばらしい夕食を見て食欲がなくなる人がいることを知って私は驚きました。私の2か月に及ぶ航海はこうして驚きと発見で始まったのです。(以下略)

～インタビューを終えて～

自分の置かれた立場や周りの人々に常に感謝の気持ちを忘れない谷口さん。現在のお仕事にも真剣に取り組んでおられる様子は、緒方貞子氏もときにおっしゃっているnoblesse oblige(ノブレス・オブリージュ：フランス語で「高い身分に伴う義務」の意味)という言葉思い出させるものでした。つまり、谷口さんにふさわしい社会的義務があり、それを真摯に果たそうとしておられる姿勢が感じられました。

平野正俊さん 第12回「青年の船」参加青年



静岡県掛川市の体験学習農園「キウイフルーツ・カントリーJapan」代表の平野正俊さんをお訪ねしました。ここは日本最大のキウイ農園。およそ80種類が栽培されています。平野さんは昭和53年度 第12回「青年の船」に参加されました。また、昭和49年に国際農業者交流事業でアメリカに2年間滞在され、そこでキウイフルーツと出会います。当時、日本ではまだ知られていなかったキウイフルーツ栽培に着手されたきっかけ、乗り越えなければならなかった課題、農業への思い、国際交流事業が与えた影響についてお話を伺いました。

国際交流事業から受けた影響

—第12回「青年の船」事業に参加された体験は、人生のターニングポイントになりましたか。

これまでの自分の世界とは違うところに、新しいネットワークができたね。海外の仲間とのつながりもできたけれど、国内でさまざまな団体活動をしている人たちとの出会いが大きかったと思う。

国際農業者交流事業への参加
(米国：昭和49年～51年)

—昭和49年にアメリカの農業交流に参加されたきっかけはどのようなことだったのですか。

子どものころから冒険心が旺盛で、小学校4年のとき、家から4時間程歩いて御前崎まで行ったこともあった。その後、自転車に乗り始めて活動範囲がどんどん広がって、高校生のときには、日本の南の方は自転車でほとんど回った。自転車で走って疲れて座っていると、子どもが話しかけてきたり、近所のおじいちゃんおばあちゃんがスイカを冷やして持ってきてくれたりする。スイカにかじりつきながら、友だちや、学校、両親のことなどいろいろ話をする。「将来何をするの？進路はどうするの？」と聞かれたことがある。その時は適当に夢物語を話してすませたとしても、その後、自転車のペダルを1回1回こぎながらじっくり考えるわけ。

あるとき、高知県の桂浜に着いて太平洋の大海原を眺めながら、「次はア

メリカだ」と思い始めた。でも、当時はまだ留学できるような環境ではなくて。誰かが海外に行くとなると、村長さんまでやって来て、みんなで万歳！と言って送り出すような時代だったから。ちょうどそのころ外務省の外郭団体が主催している「国際農業者交流事業」というアメリカでの2年のプログラムを見つけてそれに応募したわけ。農業というテーマはおもしろいと思ったし、親に負担をかけないで渡米できるという理由もあってね。

職業としての農業を意識

—今、こうして農業を営んでおられますが、家業を継いだという感覚はないのですか。

ぜんぜんないね。僕が渡米したころ、日本では、長男だから、家が農家だから農業をするという人が多く、彼らは自分で選択して農業をしているわけではなかった。でも、アメリカではプロフットボール選手や野球選手などあらゆる職業の人が、いつかは農場を持って農場経営をしたいと考えていることが分かった。彼らは自信と誇りを持って、農業を職業として選択していた。自らが主体的に取り組んで初めて農場の経

平野氏の経歴

- 1974 国際農業者交流事業への参加
- 1976 ティースプーン一杯のキウイフルーツの種子から栽培に取り組む
- 1979 第12回「青年の船」参加
- 1989～90 日米コミュニティーリーダーシッププログラムへの参加
- 1990 体験学習農園の開園
- 1994 静岡県農業経営士
- 1995 農林水産省農業総合研究所・非常勤研究員
- 1996 地球人学校・ニュージーランド環境教育プロジェクト主催
- 1998 静岡大学農学部・人間環境科学科・非常勤講師
- 2002 NPO法人掛川国際交流センター・理事長
- 2005 国際ロータリークラブ・青少年交換・カナダ、アメリカ、メキシコ、ブラジル担当

ターニングポイント

営者になれる。こういうことを学んで、農業はそれほど「カッコいい」職業なのかと自分の中で吹っ切れた。

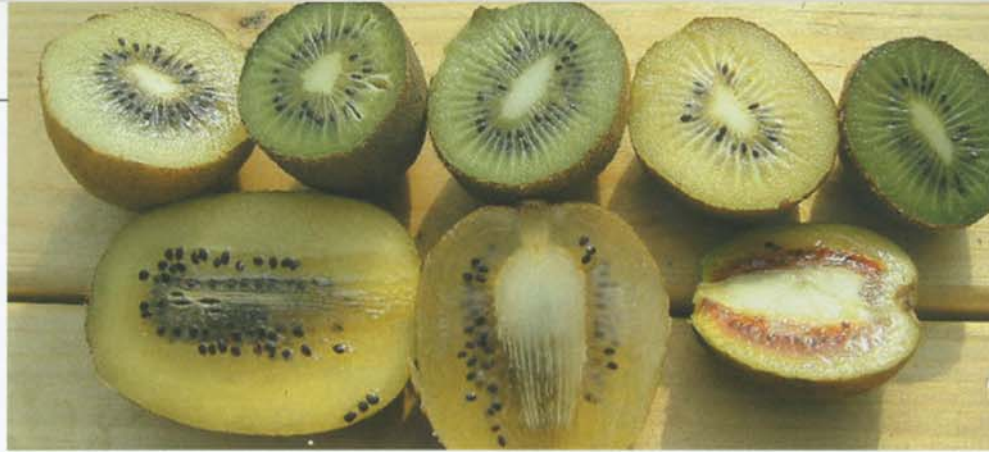
キウイフルーツとの出会い

新しく導入された植物が栽培可能かどうか、どのように普及を図るのか研究している「導入植物研究所」で、たまたまキウイフルーツと出会った。茶色くて毛が生えていて、中はエメラルドグリーン、食べてみたら今までのフルーツにはない感覚。当時、日本ではまだ栽培されていなかった。まだ誰も手をつけていないということに魅力を感じ、キウイフルーツを栽培しようとアメリカから日本へ導入を図ったが、動植物検疫の関係で許可が下りなかった。落胆していると、アメリカの友人がティースプーン一杯のキウイフルーツの種をプレゼントしてくれた。それを大事に持ち帰って植えたのがこの農園のスタートだった。

友人の援助を得て

国際農業者交流事業終了後、約30%の人が海外に出て行って農場経営をする。僕は熟慮の末、静岡でやっていると思ったが、誰も土地を貸してくれないし、親は「自分でやりたいなんてとんでもない話。資金はどうする」と言って反対する。だから、家の横にある畑を有償で強引に借りた。みかんが植わっているのに、親の留守中にチェーンソーで切ったこともあった。そうして、少しずつ畑を増やしていった。

「青年の船」に参加したとき、とてもいい思い出がある。乗船する時期に、棚の工事や植え付けをしなくてはならなかった。僕は最初だけやって、僕が船に乗っている間に、友だちが植え付けも棚の工事も全部してくれていた。



キウイフルーツ・カントリーで栽培されているキウイフルーツの一部

この青年の船に参加することは、地域の仲間からの期待も大きかった。当時、僕はお金がなく、やっとの思いで手に入れたオートバイを売って、そのお金を持って事業に参加したくらいだったから、友だちが手伝ってくれて本当に助かった。

—キウイフルーツの栽培は日本で初めてだったのですね。見たこともないフルーツの栽培を始めると平野さんがおっしゃったとき、お友だちはどんな気持ちで手伝ってくれたのでしょうか。

僕は高校生のころから自転車で旅をしたり、その話を人前で発表したりしていたから、ある意味、奇人変人扱いされていた。そんな僕に興味をもってくれる友だちは、いい仲間だった。そして、当時、4Hクラブという団体があった。これは1902年アメリカで誕生したアメリカ最大の青年教育団体で、農業技術の振興、生活全般にわたる教育を展開している。日本ではこの制度を農村のリーダー育成に応用しており、当時は4Hの人たちがよくサポートしてくれた。

もうひとつの大きな転機

1984年には父が亡くなり、僕にとって人生の大きな転機となった。このような果樹は、実がなるまでに4、5年、

成園になるのに8年かかるため、長期的な視点で物事を考えなくてはならない。父は60歳前に亡くなったので、自分の場合には、あと何回収穫のチャンスがあるかと考えた。当時、僕は30歳だったから、60歳まで生きられると仮定すると、たった30回しか収穫できないと思ったものだ。今、僕は50歳だから、あと10回しかないわけだ。残された日々の中でどういう展開の可能性があるか考え始めた。これまでは、いかに生産して、収入を得、経営を維持し、家族を養うかという視点しかなかったが、父の死によって、この農場を使ってもっとやりたいことはないのか、収益を上げるだけでいいのかと考えさせられた。そして、このキウイカントリーをスタートさせることにし、開園まで5年間準備した。

既存概念との闘い

～農業を大切に考える～

掛川国際都市友好協会という国際交流団体に事務局長として10年間無報酬でかわり、その後、NPO法人の国際交流センターを立ち上げたり、地域の社会教育委員などの役職がまわってきたりして、地域社会の中で物が言える立場になった。その頃、地域の状況を知るために、様々な産業に携わる方々と一緒に地域を回ったことがあったの

だが、稲穂が金色に輝いている田んぼを見て、「この土地は有効活用されていないくて、もったいない」と言う人がいたのだ。これはどういうことかと真剣に考えたよ。田んぼで食料になる米を作り、人類のために役立っていることが評価されない、ということだよ。自分が自信を持って農業という職業を選んできたのに、そういう見方をされることが悔しかった。

地域でイニシアティブを握っている青年会議所の人たちも、そういう考え方をしている。農業委員をしていると、農村のリーダーたちとかかわることがあって、土地利用について審議したり、地域起こしのビジョンを策定したりするのだが、当時は「脱農業」＝「地域発展」だと考えられていた。例えば、工業団地やショッピングセンターができると、「おらの地域は、発展した」というわけだ。農村が農業を切り捨てて、本当の意味での発展があるのかと非常に疑問に思った。これは農村内部の問題であり、農業をしている人にも過度の依存体質がある。「何か補助がありますか?」「農協や行政は何をしてくれますか?」という具合だ。

農村の閉鎖性も感じた。海外から帰ってきて、キウイという新しいものを取り入れたり、いろいろな人や外国人が研修に来て、朝一緒にランニングしたりすると、周りから「戸塚ヨットスクールみたいだ」と言われたりする。近所では「子どもが勉強したいと言ったからといって海外に行かせると、あそこの息子みたいになっちゃう」と言われたりもした。新しいものに対する抵抗感があるわけだ。

そう言えば、子どもの頃、勉強をさぼっていると、先生から「こら正俊、勉強せんと百姓ぐらいにしかなれんぞ」

と言われたものだ。これは農業という職業をかなり見下した言い方だね。

女性が社会に出ていくことに対する抵抗感もあった。うちの女房が地域の会議に出て行くと、「おまえは家の代表じゃない」とよく言われた。江戸時代末期の家長制度がまだ残っているのだ。

このように保守的かつ閉鎖的で、新しいものや若い人、女性の意見に耳を傾けない農村の体質に問題があることに気づいた。

体験学習農園

これから農業をやっつけよう、農村を生き生きとさせようというときに、今挙げたような問題が重くのしかかってきた。これをどうしたら打破できるか? その答えが今の体験学習農園だった。物を生産するという考え方から、人々が交流し、遊びや体験を通じて、農業や自然のことを学び、それぞれが自己の成長に会える。そういう仕組みをつくりたいと思ったのだ。

経営理念については、「情報発信」として3つの視点を挙げている。

1 「自然の雄大さ」

人間と自然の調和、命の営みとは何か。

2 「農業の大切さ」

農業が果たしてきた使命、役割、農業への思い。将来の日本や地球といった大きな観点で物事を見ると、農村や農業のあるべき姿が、人類が地球上に生き永らえられるかどうかにも関係してくることがわかる。

3 「本物の味」

食料とは何かを考える機会は、実はありそうでない。食べ物、皮膚になり、肉になり、血液になって、自分たちの体ができあがっていく。でも、田んぼを見て「有効利用されていない」と言う人が存在するように、一



園内の説明をする平野氏

日本でのキウイの歴史

日本で初めてキウイフルーツが紹介されたのは、1970年の大阪万博（ニュージーランド館）にて。1975、6年に果物の老舗・千足屋などに輸入されるようになったとされています。そのころから平野さんはキウイフルーツの研究を始められ、国内産キウイを最初に千足屋に出荷したのも平野さんでした。

般社会では、食料を食して自分が生きていることが認識されていない。各家庭では食事が安易に捉えられており、家族みんなで食事をする割合も減っている。

「本物の味」という視点も重要だ。食しているものが安全であればいいというだけでなく、安心なものでなくてはならない。では、その安心とは何なのか。現代社会では、産地偽造、鳥インフルエンザ、BSEや遺伝子組み替えの問題が出てきて、どこかがおかしくなっている。こういう観点も含めて、食の安全、安心、本物の味とは何かという3つの視点で情報発信をしていきたい。

あばれん坊のブタ



もう一つは、一緒に成長していきたいという考え方から、「共に学ぼう、人生の豊かさを」という観点も大切にしたい。これは、若い世代なら生き方探してあったり、家族なら親子の交流であったりする。例えば、親子でこの農園に来ると、帰りの子どもたちの表情が違う。子どもが親を尊敬して帰って行く。子どもが父親をきちんと評価して、子どもにとって自慢のお父さんになっている。自然や農業との出会いが価値観や人生観を変化させ、豊かな人生、豊かな家庭作りにつながってほしいという願いがこの理念にこめられている。こうして、1990年に「食料」「教育」「社会」「文化」という四つの軸を持つ体験学習を行う「体験学習農園」をスタートさせた。

「とても貧しくなってしまった」

当時、北海道の農村留学や山梨のぶどう狩り、静岡の久能のイチゴ狩りなどの観光農園はあったが、「体験農園」という言葉すらなかった。僕はキウイと一緒に野菜なども植えて、自然教室を開発しようとコツコツと取り組み始めた。1984年にお茶とミカン園を相続し、茶園の面積を増やして、お茶だけで1,000万円程の収入が得られるようになってはいた。ただ、お茶で生きていくつもりなら、もっと勝負をかけていく必要があった。では、キウイに賭ける自分の思いはどうなるのかと考え、結局、お茶の栽培を全部やめた。だから、体験学習農園を始めると非常に貧しくなってしまう、その後3年ぐらいは危機的状態だった。2年目に見事に失敗したのも原因だった。お金をかけてテレビコマーシャルを作ったけれど、効果はなかった。その頃はバブル末期で、夕方6時から8時の間に放送すると15

秒1本、1回だけで30万円もかかるというのに、蓄えを全部それに投資したので、ますます状況が悪化した。年末には「来年を迎えられるかな」と思いながら冷や汗をかきかき、宝くじを少しだけ買ったこともあった。

節約に節約を重ね、金融機関に継続融資してもらって何とか乗り切った。そのような状況でも、着々と計画を進め、バーベキュー、キャンプ場、品種開発研究をして、ようやく継続して経営できるようになってきた。最近では、学校関係、中学生のファームステイなどが増えている。ファームステイで農家や民宿に泊まることはあっても、一般の農家に入って研修する仕組みはない。この農園では200人くらい来ても、それぞれ分宿して研修ができるだけのネットワークがあるし、おかげさまで、応援団もたくさんできた。「国際農村ネットワーク」「体験農園学習を育てる会」「静岡発ホンモノの味を探せ」など様々なグループが、ここに事務局を置いて静岡県内、全国、それから海外で活動している。だから、周りの評価もかなり高くなってきた。経営も今は安定しているので、また次のことをやろうと思っている。

～インタビューを終えて～

「貧しくて大変な時期を、どんな思いで乗り切られたのですか」とお尋ねすると、「自分がやっていることは絶対に間違っていないはずだと思っていたから」と平野さんは穏やかな表情で答えてくださいました。苦労を苦労と感じさせないさわやかな話しぶりでしたが、強靱な精神力、目標達成のためにはいかなる妥協も許さないという強さに感銘を受けました。

次の目標

一次のビジョンは何ですか。

次は環境教育でもう少しフィールドを拡大したい。果実も足りないから、生産できる仲間を増やす。もう一つは、農場を新規に設けてやっていく必要があると思っている。僕にはあと10年しか残されていないから、たった10回しか収穫できないわけで、一応一つのくぎりをつけようと思っている。その後、もっと長く生きられたら儲けものだけれど。

キウイ農園



Kiwi Fruit Country
YAMAKA FRUITS FARM JAPAN
KAMIUCHIDA, KAKEGAWA-CITY

「体験学習農園」
キウイフルーツ・カントリーJapan

〒436-0012 静岡県掛川市上内田2040
TEL.0537-22-6543 FAX.0537-22-7498

☎0120-014791
E-mail : wbs02626@mail.wbs.ne.jp
ホームページ : http://www.kiwicountry.jp/

スマトラ沖地震の国際緊急援助隊に派遣されて

第6回「世界青年の船」参加青年

鈴木 貴子



医療チーム全体写真（筆者は前列右から5番目）

私は、いつ東海地震が発生してもおかしくない静岡に住んでいます。昨年秋に新潟県で起きた中越地震、年末に発生したスマトラ沖地震及び津波災害も他人事とは思えませんでした。更に、今回の津波災害の被災国であるスリランカ、インドは私が参加した第6回「世界青年の船」の寄港地であり、既参加青年のキャビンメイトや友人がいること、また「ルネッサンス招へい事業」等でインドネシアやタイ等東南アジアの青年とも交流をしていたので、26日以降ずっと彼らと家族の安否が気になり、何か支援をしたいと思いました。

12月29日午後JICAから翌30日午前国際緊急援助隊・医療チームをタイとインドネシアへ派遣することについて連絡があり、私はすぐに「派遣先はどちらでもいい」と返事をしました。そして私は、医療調整員として、12

月30日より2005年1月12日までタイに派遣されました。

大晦日、プーケットから被害が一番ひどいバンガー県に向かいました。途中、カオラック・ビーチ沿いのホテルや商店が跡形もなく流され、海上警備艇が海岸から1km離れた場所に打ち上げられている等、想像を越えた凄まじい惨状を見て、津波の恐ろしさを知りました。

現地到着後は、日本や海外のメディアで何度か紹介されたナムケム村にあるナムケム小中学校の教室を借りて診察が開始され、私を含め一部の隊員はナムケム港から近くの小島に残っている島民のニーズ調査に出かけました。島民の多くは既に本土に避難していましたが、一部の人は海が怖いと、海から離れた島の奥に逃げているとのことでした。

医療チームは3チームに分かれ、学校での診察、巡回診



避難生活中でも明るい子どもたち

療にあたり、活動開始数日後からは、バームアン避難民キャンプにおいて診療 TENT を設営して1月10日まで医療活動を行いました。目の前で妻が波に流され行方不明と訴えた怪我人、2日間水の上に浮いていて救出され背中を日焼けによって痛めた子どもなど、被災者は家族や友人を亡くしたり、行方不明だったり、家や仕事を失い、心身ともに傷ついていた。

私は、医療調整員として主に診療所にて診察の受付、カルテ管理の他、被災者へインタビュー等を行いました。

帰国の前日、大使館等での報告を終えた夜、「東南アジア青年の船」タイ同窓会の役員の一入ビジット氏と昨年「東ア船」に参加した青年と会いました。タイの同窓会組織が毎年行っているプログラム(Hopeful Children Program)に津波被害に遭った子どもたちを招待したいということでしたので、被災者の生活などの報告をし、今後のプログラム運営の助言をしました。

日本人として、アジア人としてタイの被災者にとって少しでも力になればと思って活動を行いました。診療所内外で会う人々と共に協力しながら今回の医療活動を無事に行うことができましたことを幸いに思います。

亡くなられた方のご冥福と行方不明者の早期発見及び、被災地の一日も早い復興を祈っています。



象を使って瓦礫除去作業中



被災者にインタビューする筆者(左端)



テント生活をする家族



「共生社会の精神に基づく国際協調を目指して」 IYEO20周年の年に行動しましょう！

日本青年国際交流機構会長

田中 南欧子

全国の会員の皆様こんにちは。昨年は、佐賀の全国大会、各ブロックでの「青少年国際交流を考える集い」などで会員の方がたにお会いして地域での活動についてお話する機会もあり、マレーシアで開催されたSIGA（東南アジア青年の船同窓会年次総会）ではアセアンからの参加者と国際ネットワークの大切さを認識しあうことができました。

20周年を迎えた今年の活動方針は、総合テーマを「共生社会の精神に基づく国際協調を目指して」とし、個人、地域、国を意識した3本の柱を立てて活動を推進していくことにしました。（P.18参照）そして、具体的なスローガンは、地域に合わせて各ブロックで独自のものを作っていたくことになりました。IYEOのような全国的規模

の大きな団体では、それぞれの地域によって活動状況もいろいろ違いがありますが、地域の特性を生かした活動を展開し、20周年の取り組みに生かしていきましょう。

また、昨年は未曾有の災害の多い年でもあり、被害にあわれた会員の方々も多く、スマトラ島沖地震による津波では、悲しいことにインドネシアで「東南アジア青年の船」既参加青年にも3名の犠牲者が出ました。支援のための募金には、全国の会員の方々や、第17回「世界青年の船」参加者、メキシコ同窓会からも協力をいただき、私たちのネットワークが、生かされたことに感謝申し上げます。こうした力が、より社会に貢献できるものとなるよう頑張っていこうではありませんか。

今年度もどうぞよろしくお願いいたします。

第41回全国推進会議より

平成16年度第2回目の開催となる全国推進会議(第41回)が、平成17年3月5日～6日に(独)国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて開催されました。多くの議題が論議されましたが、とりわけIYEO設立20周年に伴い審議が続けられていた財政基盤の整備と20周年記念事業について、実施の方向性が打ち出されたのは大きな進展でした。また、活動方針の見直しも行われ、18ページにありますように「共生社会の精神に基づく国際協調を目指して」との統一方針と個人、地域、団体としての視点から設定された3本のテーマが掲げられました。

財政基盤の整備については、自主財源の比率を高めるために、会員への寄付協力依頼を展開することを決議し、会員に活動報告の詳細を周知すると共に、寄付の協力を呼びかけることになりました。活動方針の詳細説明を、次号で改めて掲載します。

日本青年国際交流機構役員名簿

会長	田中南欧子	事務局長	酒井 昇	顧問	寺下 英明
副会長	大橋 玲子	事務局長次	野村 隆紹	//	奥野 照義
//	佐藤 周一	//	本田 温子	//	坂田 清一
//	中野 智昭	幹事	大久保信一	//	大森 充
//	大河原友子	//	藤本 和子	//	酒井 洋幸
//	齋藤 珠恵	//	久保 直子	参 与	大谷 直義
ブ ロ ッ ク 幹 事	北海道	佐藤 恵一	//	//	三浦 博史
	関東	渡辺 英明	//	//	小塚 昭郎
	北信越	田中 克宜	//	//	森田 正英
	東海	鈴木 伸彦	監査役	焼野嘉津人	
	近畿	松本 仁孝	//	椿 景子	
中国	林 亜有子				
四国	知田 芳彦				
九州	上杉 聖次				

日本青年国際交流機構平成17年度活動計画

I. 日本青年国際交流機構平成17年度活動方針

「共生社会の精神に基づく国際協調を目指して」

- 1 相互理解を深めるための自己研鑽を図ろう
- 2 地域社会における国際交流活動を推進しよう
- 3 歴史ある国際交流団体として社会貢献活動に取り組もう

II. 日本青年国際交流機構平成17年度事業予定

1 全国推進会議の開催

- 第42回全国推進会議

日 程：平成17年11月18日(金)～19日(土)

開催地：宮城県

2 全国大会の開催

- 第21回全国大会宮城大会

日 程：平成17年11月19日(土)～20日(日)

開催地：宮城県

- 第43回全国推進会議

日 程：平成18年3月4日(土)～5日(日) 開催地/東京都

3 ブロック大会（青少年国際交流を考える集い）

各ブロック共平成17年度中にブロック大会を開催する。

（開催予定県は、P20参照）

4 IYEO設立20周年記念事業への取り組み

設立20周年記念事業を実施する。

5 都道府県 IYEO役員研修の開催

都道府県IYEOで事務局を担当する役員メンバーから代表者を集めて、実務研修を行う。

日 程：6月18日(土)～19日(日)(1泊2日)

開催地：東京

6 海外とのネットワーク

- (1) SSEAYP国際ショナル第17回総会の開催（於：ベトナム）
- (2) 「世界青年の船」事業国際ショナル・リユニオンの開催（第18回「世界青年の船」運行中の寄港地で開催）
- (3) 中華全国青年連合会を基本にした日中青年親善交流事業の中国既参加青年との連携
- (4) 日韓青年親善交流事業の韓国既参加青年との連携

7 事後活動「Bulletin Board」の発行

（年5回（マクロコスム発行時に同封）/9月号は、全国大会案内状送付）都道府県IYEOの連絡文書発行に助力する。

8 内閣府青年国際交流事業報告会の開催（年3回）

内閣府政策統括官（共生社会政策担当）及び（財）青少年国際交流推進センターと共催。

9 平成18年度内閣府青年国際交流事業募集広報への協力

日本青年国際交流機構設立20周年記念事業について

実施プロジェクト一覧

プロジェクト名	内 容	時 期
グローバル・フォト・コンテスト	「食のある風景」をテーマに写真コンテストを開催し、優秀作品をラミネート加工、ケースに入れて貸出し可能なキットを作成。日本・世界各地で写真展を開催。	実施中 H17.2月(投票) H17.4月(キット作成)
冊子「ターニングポイント」	特徴ある活動を行っている会員を紹介する「マクロコスム」の同企画ページに加筆したものを記念誌として発行する。	実施中 H16.11～H17.3(マクロコスム) H17.11(第1巻発行)
IYEO:CAFÉ	各都道府県組織において実施する総会を「IYEO:CAFÉ」として、更なる会員間の交流の場を提供する。	H17.4～ (各県総会開催日に併せて実施)
スタディツアー	海外へのスタディツアーを実施し、国際交流の意義を再確認する。	
IYEO新入会員向けリーフレット作成	組織に関する基本情報、活動事例、その他関連資料を網羅したリーフレットを作成し、新入会員の活動参加に役立つ情報源を目指す。	H17.9(配布開始)
広報活動	組織整備の一環として、各都道府県組織における広報活動を例示し、組織及び諸活動の更なる周知を図る。	実施中

日本青年国際交流機構第21回全国大会宮城大会

11月の全国大会に向けて、盛り上がってきた宮城IYEO。全国からたくさんの方たちに集まってもらいたいと、宮城IYEOならではのプログラム作りを行っています。宮城を見て、感じて、体験して、そして人の輪、IYEOの輪を更に大きくして頂けたら…と準備を進めています！！



日程：平成17年11月19日(土)～20日(日)

場所：ホテル松島 大観荘

宮城県宮城郡松島町松島字犬田10-76

TEL 022-354-2161(代)

FAX 022-353-3431

<http://www.taikanso.co.jp/>

日 程 案

(平成17年4月1日現在)

全体会 (案)

宮城IYEOが自信を持っておすすめする宮城在住の方を講師に迎える予定です。

分科会 (案)

【IYEOディスカッション】

⇒会員間の情報交換や素朴な疑問等、IYEOについて気軽に話せる場を提供します。

【留学生と国際交流】

⇒宮城在住の「東南アジア青年の船」既参加青年を含む留学生と楽しい時間を過ごします。

【アフガニスタン帰国報告会】

⇒宮城IYEO会員のアフガニスタンでのNGOにおける3年間の活動を報告します。

仙台伝統「雀踊り体験」

⇒伊達政宗時代から続く踊り。誰でも簡単に楽しく踊れます。

【利き酒講習会】

⇒宮城の地酒を楽しむ方法を学びます。

地域理解研修 (案)

【殺付き牡蠣の詰め放題付きクルージング】、【こけしの絵づけ&秋保温泉】



～全国の皆さん、宮城でお会いしましょう！！～



第17回「世界青年の船」事業報告会

平成16年度内閣府青年国際交流事業報告会

今年度の船上プログラムでは、「青年の社会活動」をテーマに、6分野に分かれてディスカッションが行われました。報告会当日は、船上や寄港地での体験を、スライド、展示、踊りや歌も交えて様々な工夫を凝らしてお伝えします。ぜひ、お越し下さい。

主催／内閣府政策統括官（共生社会政策担当）

（財）青少年国際交流推進センター

日本青年国際交流機構（IYEO）

日時／平成17年6月12日（日）13：00～16：30

会場／国連大学3F ウタント・ホール

東京メトロ銀座線、千代田線、半蔵門線

「表参道」下車 徒歩5分

参加費／無料

<http://www.unv.edu/hg/japanese/access/index.html>

申込方法／下記の間合せ先へ、氏名、住所、電話番号、内閣府事業参加者の方は事業名を、参加歴の無い方は「一般」と記載のうえ、葉書、メール、FAXにてお申込下さい。

間合せ先／〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町
2-35-14 東京海苔会館6階

（財）青少年国際交流推進センター報告会担当 宛

Tel：03-3249-0767

Fax：03-3639-2436

E-mail：swyaa@iyeo.or.jp

平成17年度青少年国際交流を考える集い（ブロック大会）一覧

ブロック	開催県	開催日	ブロック構成都道府県	会場
北海道・東北	宮城県	11月19日～20日 (全国大会)	北海道・青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島	ホテル松島大観荘 (宮城県松島町)
関東	茨城県	6月25日～26日	茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川・山梨	大洗シーサイドホテル (東茨城県大洗町)
北信越	石川県	8月を予定	新潟・長野・富山・石川・福井	未定
東海	静岡県	未定	静岡・愛知・岐阜・三重	未定
近畿	大阪府	8月21、22日	滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山	未定
中国	岡山県	未定	鳥取・島根・岡山・広島・山口	未定
四国	愛媛県	未定	徳島・香川・愛媛・高知	未定
九州	大分県	未定	福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島・沖縄	未定

国際青年育成交流事業討議セッション(第3回)募集概要

I 概 要

1 目 的

国際青年育成交流事業(外国青年招へい)のプログラムの一環として、世界11か国から招へいた外国青年と、国際的な問題に関心の深い日本青年とが、テーマごとのグループに分かれて率直な意見交換を行うことにより、それぞれのテーマについて、日本独自の考え方、あるいは、全世界で通用する考え方がどのようなものかという認識を深め、国際的対応力を身につける機会とします。

2 事業の概要

(1)開催期間

平成17年7月12日(火)～7月16日(土)までの5日間

(2)会 場

独立行政法人 国立オリンピック記念青少年総合センター
(東京都渋谷区)

(3)参加者

- ア 日本青年 約60名(内閣府により、応募した者の中から選考)
- イ 外国青年 約100名(「国際青年育成交流事業(招へい)」に参加している11か国の青年(カナダ、チリ、ドミニカ共和国、グアテマラ、ハンガリー、ヨルダン、カザフスタン、ミャンマー、ノルウェー、セネガル、チュニジア))

(4)プログラム内容

テーマ別に分かれたグループごとのディスカッションを中心として、それぞれの分野の知識を深めるとともに、異文化を理解します。プログラムを通してディスカッションの進め方やコミュニケーションの技術、発表方法などを身につけられるようにします。

日 程	
7月12日(火)	日本参加青年オリエンテーション ディスカッション講座、ディスカッション準備
7月13日(水)	外国青年との交流会、ディスカッション
7月14日(木)	課題別視察と、グループ別ディスカッション
7月15日(金)	グループ別ディスカッション、発表会準備
7月16日(土)	発表会、修了式

(5)テーマ

- ①環境 ②情報 ③企業の社会貢献
- ④教育 ⑤ボランティア活動 ⑥伝統文化

II 募集について

1 応募資格

- (1)ディスカッション可能な英語能力を有すること。
- (2)全日程参加可能であること。
- (3)年齢は20歳から35歳の者。
- (4)選択したテーマについて討議可能な経験、知識を有すること。
- (5)開催国参加青年としての自覚を持ち、円滑なプログラム運営に協力できること。
- (6)国際青年育成交流事業(海外派遣)参加申込みをされている方も参加できます。

2 募集人員 約60名

3 共通言語 英語

4 募集方法

(1)提出書類

ア 参加申込書(内閣府のホームページ
(<http://www8.cao.go.jp/youth/koryu1.htm>)から様式をダウンロードできます。)

イ 課題の作文

- ・英作文:志望動機を600～800wordsで述べてください。
- ・和作文:第1志望として選択したテーマに関して、今、あなたが最も注目していることについてあなたの意見を、1,000～1,200字で、述べて下さい。(書式は、いずれも縦A4判横書きとし、題名及び氏名を明記すること。(題名及び氏名は字数に含みません。)なお、作成に当たっては、パソコン、ワープロの使用も認めることとします。)

(2)提出方法(郵送)

内閣府政策統括官(共生社会政策担当)付国際交流第1担当
〒100-8970 東京都千代田区霞ヶ関3-1-1 合同庁舎第4号館

(3)締 切

平成17年5月31日(火)消印有効

(4)参加費

無料(宿泊、食費、プログラム中の移動費などの経費は主催者負担。開催会場までの交通費は本人負担。)

(5)その他

- ・提出書類は返却しません。
- ・参加が決定した場合は、情報交換のため、事務局が設定するメーリングリストに登録します。また、それに伴い、氏名を他の参加者に公開します。その他の情報については、必要に応じて、了解をいただいた上で公開します。

5 決定通知

選考の結果は平成17年6月中旬までに本人に通知します。

航空機派遣OBのためのメールによる情報発信を開始します！

この度多くの会員の御要望に応え、「航空機による海外派遣」事業既参加青年へメールによる情報発信を開始いたします。これにより、IYEO及び(財)青少年国際交流推進センターの活動状況や各種事業の運営スタッフの募集状況などを知ることができます。

その他、OB有志により、編集委員会を結成し、メールマガジンの発行も考えています。

登録ご希望の方は、派遣年度、派遣国、お名前を明記の上、airnet@iyeo.or.jpまでお知らせください。5月末までに御連絡いただいた方には、8月から情報の発信を行います。

対象は、航空機派遣既参加青年のみ(育成交流、中国、韓国派遣、団長、副団長、団員)とします。

尚、このメールマガジンに関する詳細は、<http://www.iyeo.or.jp/Air/airnet>をご覧ください。



お詫びと訂正

マクロコズム2005年3月号 (Vol.63) P.12 「『日韓交流連絡会議』に期待するもの」の執筆者は川島伸明さんではなく、正しくは久保直子さんでした。お詫びして訂正します。

編集後記

今月号よりマクロコズムの編集担当となりました。お忙しい中、こころよく取材や原稿の執筆依頼に応じてくださった皆さま、ほんとうにありがとうございます。おかげさまで、5月号が完成しました。今後ともどうぞよろしくお願ひします。(ふ)

*本誌の年間購読をご希望の方は、(財)青少年国際交流推進センターまで葉書又はFAXにてお申込み下さい。年間購読料は1,500円です。

MACROCOSM 5月号 Vol.64

2005年5月1日発行 (隔月発行)

編集 マクロコズム編集委員会

発行 財団法人 青少年国際交流推進センター

〒103-0013 東京都中央区日本橋

人形町2-35-14 東京海苔会館6階

TEL 03-3249-0767

FAX 03-3639-2436

e-mail hq@iyeo.or.jp

URL:

<http://www.centerye.org>

(CENTERYE)

<http://www.iyeo.or.jp> (IYEO)

編集協力 内閣府政策統括官 (共生社会政策担当)

日本青年国際交流機構 (IYEO)

定価 198円 (本体189円)

印刷所 柏木印刷株式会社

TEL:03-5395-3954

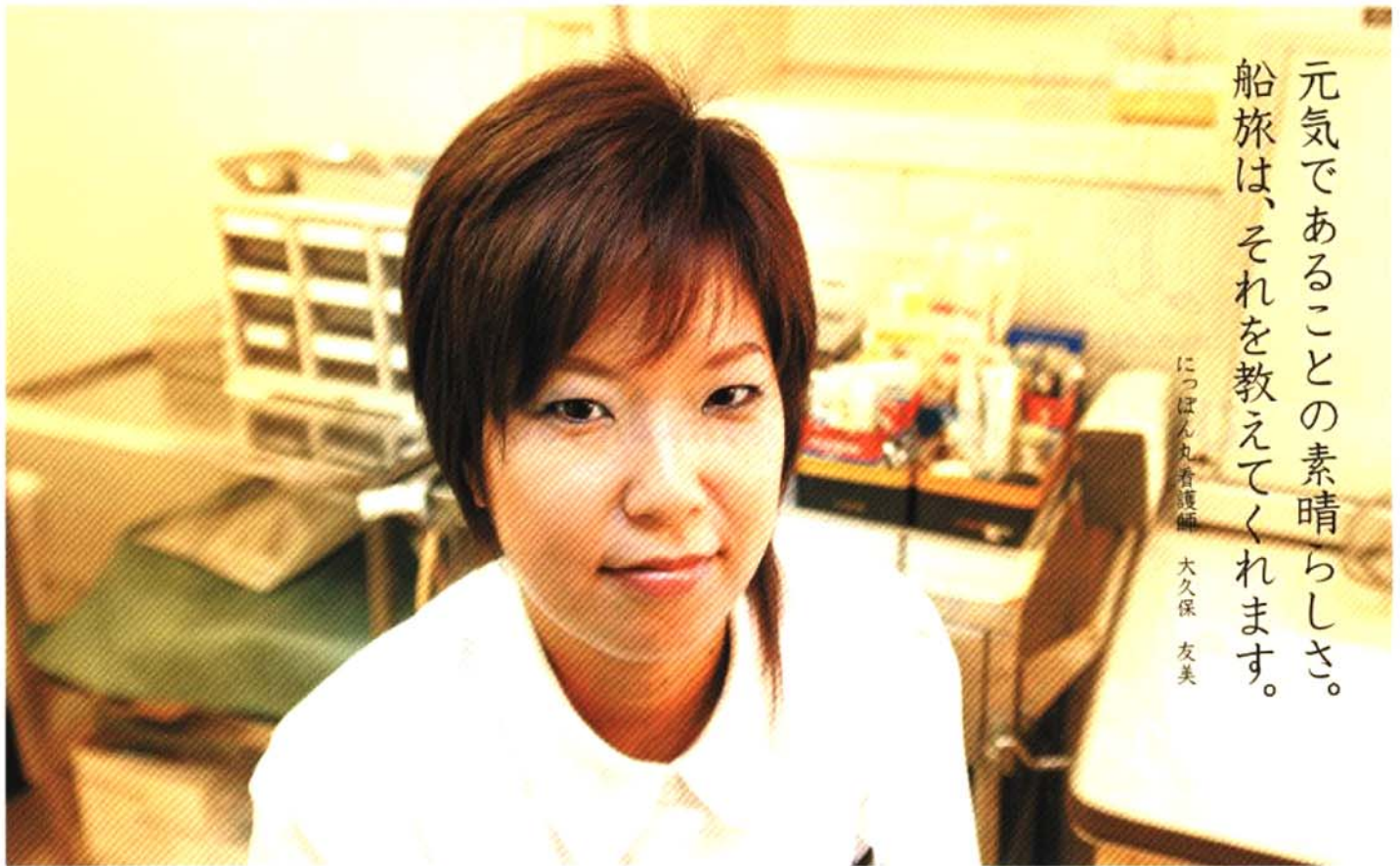
since
1884
Pioneer Of
Cruise



USPHは米国公衆衛生局が米国に入港する客船に対して毎年検査を行い衛生検査を実施しています。にっぽん丸は、2000年から3回連続して100点満点中99点を取るなど日本郵船では最高の評価を5年連続で獲得しています。



冒険する生活
にっぽん丸

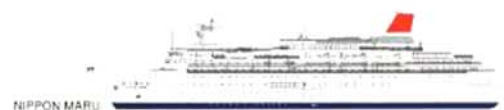


元気であることの素晴らしさ。
船旅は、それを教えてくれます。

にっぽん丸看護師 大久保 友美

神戸の病院勤務を経てにっぽん丸に乗った大久保友美。ドクターと共に、お客さまの“もしも”に備えるたった一人のナースである。「明け方だろうが、深夜だろうが、お加減の悪いお客さまがいらっしゃれば支えになるのが私の仕事。それは船も病院も変わりません。」とはいえ、そこには決定的な違いがある。「病院に来る方は、病を治しに来るのが目的。患者さんのお名前を、病名と関連付けて覚えていたほどです。しかし船のクリニックを訪れるお客さまは、基本的には皆元気で、日ごろは薬剤として船旅を楽しまれていらっしゃる…。根本的な目的が違うのだと大久保はいう。「そんなお客さまの姿を拝見していると、ああ、元気でいいなど改めて思います。私などの出る幕もなく、このまま穏やかな時間が過ぎてくれればいいのになど…。」病の辛さ、そして健康であることの尊さを彼女は誰より知っているのだ。小さな頃から海が好き、旅が好き、そして何より人のことが大好きだった大久保。どんな時も笑顔を絶やさぬ、にっぽん丸の誇り高きナースである。「元気がいちばん。そう思いませんか？」そういって彼女は笑った。

もてなしにも、品質があります。にっぽん丸の船旅



<p>新島・神津島クルーズ</p> <p>横浜→新島→神津島→横浜</p> <p>2005年5月19日(木)～5月22日(日) 108,000円</p>	<p>初夏の日本一周クルーズ</p> <p>横浜→神戸→宿毛→平戸→博多→富山→能代→小樽→横浜</p> <p>2005年5月30日(月)～6月10日(金) Fコース 89,000円</p>	<p>屋久島・日向クルーズ</p> <p>横浜→屋久島→日向(細島港)→横浜</p> <p>2005年6月11日(土)～6月16日(木) 178,000円</p>
<p>花の水郷潮来と伊豆下田クルーズ 名古屋発着</p> <p>名古屋→大洗(初寄港)→下田(初寄港)→名古屋</p> <p>2005年6月17日(金)～6月20日(月) 122,000円</p>	<p>初夏の八丈島と神津島クルーズ 関西発着</p> <p>神戸→八丈島→神津島→神戸</p> <p>2005年6月21日(火)～6月24日(金) 108,000円</p>	<p>2006年世界一周クルーズ</p> <p>横浜・神戸発着(各101日間)19ヶ国24港</p> <p>2006年4月6日(木)～7月16日(日) 2,900,000円</p>

そのほかのクルーズもご用意しております。表示の代金はステートルームC1室を2名でご利用の場合の大人お一人様・国内クルーズは消費税込の旅行代金です。*：各種のコースがございます。**：熟年割引代金です。

商船三井客船 〒107-8532 東京都港区赤坂1-9-13 三井物産ビル5F MOPASは船三井客船の登録です。 お問合せは、各クルーズ取扱会社またはMOPAS CA-デスクへ。 クルーズデスクフリーダイヤル ☎0120-791-211 <http://www.mopas.co.jp>



旅も楽しめる合宿にしたい。



急に1週間の全国出張になった。

ひとりひとりに、満点旅行。

ONE
to
ONE



家族水入らずで楽しめるプランを。



北から南まで温泉三昧したい。

商品力、サービス力、情報力、3つのパワーで、あなたの旅をさらに快適に。

旅にはさまざまな目的とカタチがあります。どんな旅でも、東急観光はすべてのお客様から満足され、喜んでいただきたいと願っています。そのために、オリジナル旅行や団体旅行など、ニーズに合わせた商品を多彩にご用意。またIT活用による最新情報の入手から24時間予約まで、リアルタイムな体制でお応えします。そして何よりも、旅の楽しさを熟知した私たちのひとりひとりが、お客様の旅を親身になって考え、最良のサービスをご提供します。

東急観光

国土交通大臣登録旅行業第38号
G日本旅行業協会正会員・ボンド保証会員
〒153-8550 東京都目黒区東山3丁目8番1号
<http://www.tokyukanko.com>
<http://tour.tokyu.com>